

羊蹄山 ぐるっと1周

作家
田村 喜子



駿河の秀峰・富士山に因んで、〇〇富士の別称を持つ山は全国にかずかずあるが、その名に最もふさわしいのが北海道の蝦夷富士・羊蹄山だろう。いつか飛行機の窓から、雲の上に頭を出した冠雪の山容を見て、東京に戻ったのかと錯覚した憶えがある。

羊蹄山は標高1,893メートル、3,776メートルの富士山とくらべれば半分くらいの高さだが、俱知

安、ニセコ、喜茂別、京極の4町と真狩村の境界に位置し、天気の良い日には遠く室蘭あたりからもその秀麗な姿を望むことができる。

羊蹄山をぐるっと1周したのは、北海道にみどり滴る夏の1日だった。

蘭越のペンションは目の前にゆったりと尻別川が流れ、牧歌のような風景がひろがっていた。川沿いの道を歩くと、ここかしこに5ミリくらいの



尻別川

穴があり、這い出してきた緑紫色の体長2センチばかりの昆虫が、成虫になった姿を披露するかのように跳ねた。ハンミョウに似ているが、本州以南に分布するというハンミョウが北海道にもいて、道案内してくれるのだろうか。

ペンションの背後の丘からは正面に羊蹄山が見えた。20年ばかり前、北海道鉄道建設の物語『北海道浪漫鉄道』を書いたが、主人公田辺朔郎・北海道鉄道敷設部長（1861－1944）は幼時から和歌の勉強をしていて（樋口一葉と同門）、北海道を舞台に秀逸な和歌を何首か詠んでいる。それに倣って、私も稚拙極まりない短歌を一首。

「尻別の川面に映ゆる羊蹄の 富士にも似たるすがた雄雄しき」（蘭越）

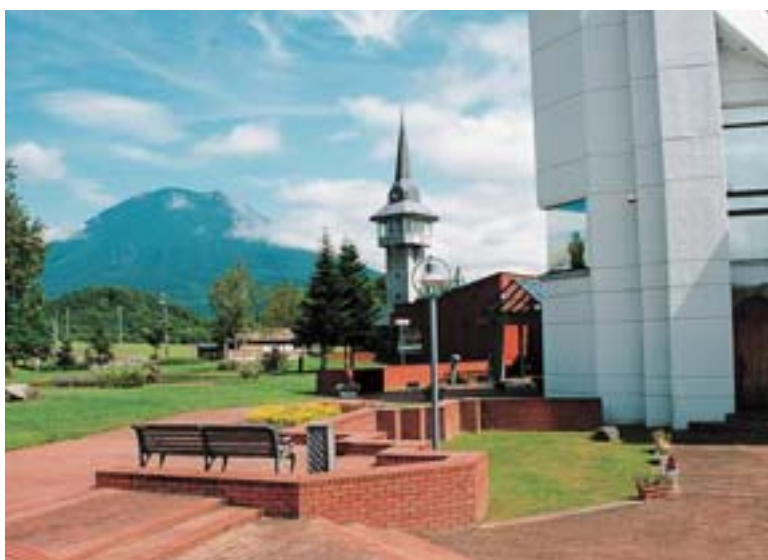
蘭越から進路を東にとり、国道5号を走る。普段はビルの林立する東京の狭い空ばかり眺めているから、北の大地の澄み切った広い空に心が吸い込まれるようだ。

やがてニセコの町に入る。道内唯一の片かなの町はスキーのメッカで知られているが、大正時代の文豪、有島武郎の心のふるさとでもあった。北米の風景を移したような有島記念公園の一角に赤レンガの有島記念館があった。

キズモノのレンガを使用したという内装に心が

遊ばされたのだろうか、あるいは大きなガラス窓をとおして見える羊蹄山の姿に心が吸い込まれたのか、それとも飯田勝幸館長の見識と素養あふれるご説明に酔ったのか、もしくは恋人に宛てた有島直筆の手紙に圧倒されたのか、平常心を失うほど有島の世界に引き込まれた。学生時代夢中で読んだ『或る女』や『生まれ出づる悩み』などを著し、婦人記者波多野秋子と心中した文豪、そして俳優・森雅之の父親であった有島武郎の世界に。大農場主の長男であった有島武郎の相互扶助の精神を記した軸が懸けられている。

「この土地を諸君の頭数に分割してお譲りするという意味ではありません。諸君が合同してこの土地全体を共有するようお願いするのです。誰でも少し物を考える力のある人ならすぐ分かることだと思いますが、生産の大本となる自然物即ち空気、水、土地の如き類のものは、人間全体で使うべきもので、或いはその使用の結果が人間全体の役に立つように仕向けられねばならないもので、一個人の利益ばかりのために、個人によって私有さるべきものではありません。それ故にこの農場も諸君全体が共有し、この土地に責任を感じ、互いに助け合ってその生産を計るようにと願います。諸君の将来が協力一致と相互扶助との観念によって導かれ、現代の不備な制度の中にあっても、



有島武郎記念館

それに動かされないだけの堅固な基礎を作り、諸君の正しい精神と生活とが自然に周囲に働いて、周囲の状況をも変化する結果になるようにと祈ります。

以上は農場主有島武郎氏が大正11年8月17日この農場をわれらに開放した時の告別の言葉の一節である。刻して記念とする。大正11年11月 狩太（註・ニセコの旧地名）共生農園」

人道主義的傾向が強く、思想的苦悩の結果、有島は財産を放棄して、当時の社会に大きな反響を呼んだ。

彼は、自分が死んだら、後方羊蹄山しりべしの麓にしるしばかりの石を立てて、その真下に自分の亡骸を埋めてほしいと望んでいたくらいだから、心のふるさととしていたこの地から見る羊蹄山によほど愛着していたのだろう。

羊蹄山にかかっていた雲がすっきりと晴れた。「文豪のいかに思わぬふるさとの山に向かいて其と語りつつ」（ニセコ）

国道5号から道道に外れ、真狩から羊蹄山を見る。ここまで見てきた羊蹄山とは少し形が違って見える。いつか駒ヶ岳を1周したことがあったが、函館や八雲あたりから見ると、ほんとうに馬の背のようだった山容が、角度を変えるとまるで違っ

た形をしていたものだ。真狩から見た羊蹄山はもっこりとした形をしていた。

真狩からは国道230号に出て留寿都へ。ここには「赤い靴公園」がある。

「赤い靴はいてた女の子 異人さんに連れられて行っちゃった」

だれもが知っている童謡だ。

ところが、実はこの女の子は異人さんに連れられ、横浜の波止場から船に乗って異国へ渡ることなく、東京の施設でわずか9歳のいのちを散らせていたのだった。

女の子の名前はきみといった。未婚の母岩崎かよは、3歳のきみを抱いて静岡県から函館に渡り、当時台頭しつつあった平民農場で働こうとしたが、厳しい開拓地へ幼な児を連れて行くにしのびず、函館の米人宣教師夫妻にあずけた。そして留寿都村で農民運動に情熱を傾けていた鈴木志郎と結婚する。

平民農場は厳しい気候や重なる災害に遭い、明治40年に閉鎖される。志郎とかよは仕事を求めて札幌に移り、志郎は北鳴新報に入社する。かよはそこで知り合った詩人・野口雨情に手放した娘のことを話した。かよはわが子が病で夭折したことを知らず、宣教師夫妻といっしょにアメリカへ渡ったと思い込んでいたのだった。母と子は2度と



赤い靴公園

会うことがなかったのだ。

この話をもとに野口雨情が作詞し、本居長世が作曲した童謡「赤い靴」は、子どものころから口に馴染んでいたが、このような哀しい背景があったことには思い至らず、羊蹄山の麓に留寿都を訪ねたおかげで知りえたことごとだった。雨情には有名な「シャボン玉」の童謡もあるが、これには生まれたばかりの子どもを亡くした親の悲しみが込められていたことも、ずっとのちになってから知った。

「赤い靴エゾすかしゆり^{あお}蒼い山^{もも} 百たび^こ仰ぎ娘の幸祈る」(留寿都)

京極は羊蹄山をはさんで、ニセコとは対角線の位置にある。山の手前には広い広い牧場がひろがり、乳牛が思い思いのポーズでのんびりと草を食んでいた。少し陽が傾いてきた。

「影ひとつさえぎるものなし北の野に 独り占めたる山ぞ気高し」(京極)

「も裾ひく姿に似たり羊蹄山 雲のマフラー風になびいて」

田辺朔郎には「天翔ける姿に似たり駒ヶ岳 雲のたてがみ風にみだれて」の秀作がある。

パロディ風に詠んでみたが、うたごころなきぞかなしき、を痛感するばかりだ。

1軒の民家の前に立ち、孤高を誇るかのように真正面にそびえる羊蹄山と向き合ったとき、この山を囲む地域に住むひとたちは、毎日どのような気持ちで山を眺めているのだろうかと思像した。東京の都心に住んでいると、日常的に山の姿を見ることはない。私のふるさと京都は盆地で、東山連峰には大文字山や比叡山があるが、たったひとつそそり立つ山ではないから、ひとつの山を身近に感じるということがないのだ。ここでは、きっと思いのたけを心の中で山に語りかけ、励まされたり、慰められたりして、そうしてこの地方独特の精神的風土を育ててきたのではないだろうか。

京極から国道230号で倶知安へ。振り返れば車のレアウインドウ越しにくっきりと、さようならと手を振って見送ってくれてでもいるように羊蹄山の姿がある。

「かくあるべしといわんばかりに聳え立つ 羊蹄山に雲の流れる」(倶知安)

この日の羊蹄山には絹のマフラーのように風になびく雲が、殊のほか印象的だった。



京極から望む羊蹄山